



北海道バスケットボール協会
指導者育成専門委員会

2008 / 4 / 9(水)

タクティクス (HBA指導者育成専門委員会ブログ)

NO. 22

優勝監督の報告

全国47都道府県プラス1(東京B)の選抜選手が集まる、いわゆる中学生の国体ともいえるジュニアオールスターでチームを見事優勝に導いた高橋和也コーチから優勝までの道程を報告してもらいました。多少長くなりますが各チームの指導者が参考になる事が詰め込まれています。

ジュニアオールスターの取り組みを振り返って

札幌市立厚別北中学校 高橋 和也

1. はじめに

私が指導する厚別北中ではここ数年全国制覇の為のエキスを少しでも吸収しようと、ゴールデンウィークに東北遠征に出かけています。ある時、加藤廣志先生の名著「高さへの挑戦」に出てくる能代工業初優勝時のメンバーの方と話す機会がありました。私は不躰ながら「念願の全国制覇を成し遂げた時は大会前から『イケルぞ!』という実感がありましたか? それともガムシヤラに取り組んでいて、気がついたら優勝という感じでしたか?」と尋ねました。その方の答えは後者でした。

この度、私は選手・スタッフを始めとした多くの方々のおかげで全国制覇という偉業に当事者として対峙することができました。「目標は?」と聞かれれば常に「全国制覇!」と答えてはいたものの、実際にその時を迎えることができた今も実感はそれほどなく、無我夢中で勝ち取った栄冠という気がしています。

ただ、このままではせつかくの貴重な経験をみすみす風化させてしまいますので、私なりに今年度の北海道選抜チームの軌跡を振り返りながら、日本一までの道程を検証していきます。多少長くなりますがご容赦下さい。

2. チーム編制にあたって

以前に北海道バスケットボール協会のタクティクスに寄稿していますので、重複した記述は極力避け、より具体的な分析をいたします。まず今年度のチーム編制で大きなポイントはPGに志水一希くん(東海第四中)という優れた選手がいたことが挙げられます。ご存知の方も多いと思いますが、彼のお父さんは札幌工業高校から札幌市役所に進まれて活躍した名シューターであり、現在は美しが丘ミニバスケットボール少年団で指導に尽力しています。さらに、お母さんも香蘭高校(現山の手高校)から札幌三越で活躍され、はまなす国体においては主将を務めた方ですから、「道産子」(敢えてサラブレッドとは言いません)としてはエリート中のエリートです。DNAに刻まれたバスケットボール競技に対する資質と、幼い頃から星一徹ばりにお父さんに鍛えられ、中学に進学してからは東海第四で切磋琢磨している志水くんは、まさにポイントガードの申し子と言えます。私の思い描く「人もボールも止まらないバスケットボール」には彼のようなPGは理想的で、彼と出会えたことはコーチとして大変幸せでした。

さらにコーチ冥利につきたのは、彼をサポートするメンバーにも恵まれたことです。特に、現在東海第四中とはライバル関係にある恵庭恵明中には小町佑樹くん(SG)と鷺見拓哉くん(C)という優秀な選手がいました。志水くん、小町くん、鷺見くん。これでバスケットボールのポジションにおける1番・2番・5番が揃うわけです。これらのポジションがしっかりすれば大きく崩れることはないわけで、安定した試合運びが保証されます。となれば、次なるチーム編制のポイントは3・4番にどんな選手を配置するか、また、志水くん、小町くん、鷺見くんをバックアップする選手としてどのようなタイプの選手を選ぶべきかを考えることが必要になります。

さらに、チーム編制の大前提としてどのような戦略・戦術を用いるかを考えることも必要になってきます。たとえば、パッシングゲームを中心とした試合運びを展開させることを考えている場合、ドリブル中心の選手を選んでも力を発揮することはできません。もちろん、その選手がパッシングゲームにも対応できるのであれば問題はありませんが、いずれにしても、選手を生かすも殺すも、選抜チームこそ戦略・戦術にかかっているとしたいと思います。

さて、私は「究極のオフェンスはフリーランス」と考えています。ある程度の約束事は決めますが、基本的には選手個々がそれぞれの持ち味を思う存分発揮するのが良いとしています。セットオフェンスでガチガチ…というスタイルはあまり好みません。その上で、北海道選抜に選ぶのであれば、シュート力があり、状況判断に優れていること(ショット・セレクションを間違わない)。そして、今年度のチームの特色である「走るバスケット」「人もボールも止まらないバスケット」に対応できるかどうか大きなポイントとなりました。このようにオフェンスはある程度選手の判断に任せていますが、ディフェンスに関しては「いかにして守るかを」をチームとして徹底しなければならないと考えます。今年度はそれほど高さがなく、また単一中学校から3～4名選ばれて中核を成すというチームではありませんでした。となると、マンツーマンディフェンスを採用した場合、高さの不利が生じてリバウンドを簡単に取られたり、スクリーンへの対応、ヘルプ・ローテーションがスムーズにできないといったデメリットも考えられました。そして、こういったデメリットを解消していくには選抜チームの取り組みはあまりに短期間であると結論づけ、2-2-1ゾーンプレスからマッチアップゾーンに移行するシステムにすることを決めました。

プレスやゾーンにももちろんデメリットはありますが、

- ① 今年のチームの高さの不利を隠し、機動力を生かせる。
- ② あれこれ余計なことを考えずに機械的な動きの中で思いきった取り組みができる。
- ③ 選抜チームだけに選手交代をどんどん行えるので疲弊する心配がない。
- ④ ポイントをおさえて相手との駆け引きを覚えれば、やればやるほど上手くなる。

といったメリットが考えられます。全国大会という晴れ舞台で舞い上がってしまう選手もいるかもしれません。だからこそ、不特定な動きになるマンツーマンよりも自分達の動きを覚えやすいプレスとゾーンの方が有効と考えたのです。そこで、10月の第一次合宿を終えた段階で補強ポイントは以下のように絞ることをスタッフと確認しました。

- ① 志水くん・小町くんに対抗するだけの力を持っているガード。
- ② シュートが上手くてオフェンスリバウンドにも積極的に参加でき、2-2-1ゾーンプレスの2列目から積極的にスティールを狙ったり、トラップに飛び出すことのできるスマールフォワードまたはパワーフォワード。
- ③ 鷺見くんの対角を務めることのできるセンターまたはパワーフォワード。

その後は各地区の新人戦結果に注目するだけでなく、「この選手がいい！」という噂を聞けば、私が指導する厚別北中と練習試合を企画して実際にその選手のプレイを観ました。

さらに、全道新人大会は私がチーム引率となりましたので、南大会にはスタッフの鈴谷先生に見てもらい、北大会には同じくスタッフの山田先生・竹治先生にスカウティングをしてもらいました。南大会・北大会のベスト4が揃う決戦大会では第1試合から第6試合まで、トイレと軽食を取るために席を立つ以外は全てのプレイ観て、上記したポイントを満たす選手がいないか血眼で探しました。そんな中である程度のメドをつけ、1月の最終合宿の取り組みを経て「これがベスト！」と考えた12名を選出したわけです。

ただ、後で冷静に振り返ってみると、今年のチームにはおもしろい特色があったことがわかりました。まず、フロアリーダーを務めることができる選手が少なくとも3名はいたということです。志水くんの強烈なキャプテンシーは言うに及びません。コートの中でも外でもコーチがもう1人いるかのようです。また、小町くんも明るい人柄と切れ味鋭く勝負強いプレイでチームをリードすることができました。さらに附属函館中の伊藤健太くんは彼らをしっかりとバックアップし、コートに出れば1番も2番もこなし、相手の動きを読んだ粘り強いディフェンスと、本数は少なくとも「ここ一番！」で決められるシュートでチームを支えました。もちろん、コート外でも志水くん・小町くんをサポートしながらも全体をまとめる力を発揮しており、2人がいなければ彼が主将となり、スタメンとしてコートに立っていたと思われます。1チームに3名のフロアリーダーが揃うことは稀です。しかし、今年に限ってはありました。このことも日本一につながる一つの要因だったと思います。

また、フロアリーダーだけでなくムードメーカーもいました。澄川中の大柳雅央くんと芦別中の小沢淳くんはプレイもさることながら、アップでも試合中のベンチでも実に良く声を出し、チームの雰囲気盛り上げました。緊張感漂うはずの決勝戦でも彼らのリードボイスは東京体育館に高らかに響き渡り、北海道選抜を勝利に導きました。本戦に入る前の道内での練習試合で、北海道選抜のアップを見て道内中学のとあるコーチは「チャラチャラしやがって！」と吐いて捨てましたが、彼らは決勝戦のハーフタイムのアップでも臆せず、大声でチームの雰囲気盛り上げたのです。ストイックに寡黙に行うのも1つかもしれません。しかし、所詮は中学生。それでは緊張感に押しつぶされてしまうのではないのでしょうか。人目をはばからず、元気よく明るく大きな声を出すことで、本来の自分達のペースをつかみ、普段通りのパフォーマンスが発揮できるのだと思います。私は2人から学びました。

3. 本戦までの練習

1月は決戦大会、最終合宿、北海道カップと一部の選手にはかなりのハードスケジュールとなりました。それぞれに意味があるわけで、簡単に整理できないのが難しいところです。ただ、北海道カップはこの時期に全国の強豪と実際にマッチアップしたことで、選手達が「やれるゾ！」という気になれたという意味で大変有益でした。私もコーチとしてじっくりと全国の戦い方を考えることができました。大会運営上、日程については異論もあると思いますが、私はこの時期の開催がベストと考えています。

もちろん、選手の疲労度は当然考慮しなければなりません。そこで、現在厚別北中でもお世話になっている日本カイロプラクティックドクター専門学院札幌校よりスポーツトレーナーを道選の練習期間に3回(1回につき3~4名)派遣してもらい、選手全員のボディケアを念入りに行いました。芦別中の三柳宥太くんはヒザの痛みにかなり悩まされていたのですが、太もものマッサージを入念に受けることですっかり良くなり、パフォーマンスを上げることができました。選手のコンディションを整えてあげることもコーチの仕事です。専門の方にマッサージして頂くことで選手の力が2倍にも3倍にもなるのであれば、今後スポーツトレーナーの導入を積極的に考えていく必要があると思います。そんなわけで第1回目の練習は、練習の傍らトレーナーにマッサージされて悲鳴をあげる選手…という変わった風景で終わりました。

翌日には早くも札幌南高校と試合を行ったのですが、これはあまり良いところなく敗戦。志水くんが英語検定試験を学校事情でどうしても受けなくてはならないためにこの日は欠席。もう1人のPGである伊藤健太くんも前日の練習で捻挫して出場できなかったのも、結果はやむなし…と言ったところでした。

最近の北海道選抜の練習は、チーム結成後は休まず欠かさず毎週末行う…といったパターンでしたが、2月第1週は休むこととしました。翌週に3連休があり、ここでしっかり練習できるという目論見があったからでもあります。前述したように決戦大会・最終合宿・北海道カップと連戦が続く子達にはこの辺でちょっと休ませてあげたいと思ったからです。北海道選抜もスタートしたばかりでしたが、今一度冷静に自分達を振り返るといっ

た意味でとても大切な休みだったと思います。

3連休は1日目を厚北でマッチアップゾーンの練習。講師に秀島先生を招き、密度の濃い練習をしました。2日目は午前中に厚北で練習をした後、午後からは大麻高校で練習試合。2-2-1ゾーンプレスからマッチアップゾーンへ移行するシステムを初めて試す試合となりました。この時に緑園中の黒坂文生くんを長身ながら機動力のある良さを活かして4番から3番に。また、身体は小さいが当たりに負けない強さを持つ小沢くんをマッチアップゾーンの下に置くコンバートを行いました。当初の予定には全くないことでしたが、2試合を経過した段階で2人の特性を考慮して踏み切りました。結果として、その後の2人の活躍にもつながっていくので、選考したときから練習を経ていく中で、チームというのはやはり変わっていくものなのだと再認識しました。3連休の最後は平岸高校との練習試合。早坂先生の恩情もあって、この試合に接戦で勝利することができたのは北海道選抜のメンバーにはものすごい自信になりました。

翌週は仙台での東日本選抜大会に出場。東北6県の選抜チームと1日目4試合、2日目は帰る飛行機の関係で連戦2試合という強行日程でした。会場となった仙台のホットハウス・スーパーアリーナは名前とは裏腹に非常に寒く、凍えてしまう環境でしたが、前述した日本カイロプラクティックドクター専門学校札幌校のスポーツトレーナーから推薦されたレスキューシートが威力を発揮。一見、ただの銀紙にしか見えないのですが、山岳救助にも使用される優れ物で、折りたたんで軽量かつコンパクトに持ち運ぶことができ、羽織るだけで選手達の保温効果を高め、寒さを克服することができました。

考えてみると、最も寒いはずの北海道はガンガン暖房を炊いて練習するのに対し、本州勢は寒い中で震えての練習ですから、冬場の練習効率は北海道の方が高いのかもしれない。結局、東日本選抜大会は6戦全勝という素晴らしい成績を残すことができ、選手は自分達の取り組みにいよいよ確かな手応えを感じるようになりました。

東日本選抜大会から帰ってきた次の週は真駒内曙中で練習。翌日は東海第四高校と練習試合を行いました。この週は大雪でJRがストップするというアクシデントが発生。JRに乗って帰れない選手のチケットの払い戻し、宿泊先の工面などスタッフで奔走しました。また、この時だけでなく、今年度のチームは札幌・石狩以外の選手が多く、宿泊先をどうするかを考えなければなりません。ミニバスが全道各地に裾の根を広げている今、これは北海道選抜の大きな課題と言えます。幸い今年強化委員長の大浦先生が恵庭恵明中時代にお世話になった水見前校長先生宅にご厚意で寝泊まりさせて頂くことができました。引率者としてはスタッフ唯一の独身である竹治先生が彼女とのデートは全て返上し、毎週泊まってくれました。寝場所を確保した上で、食事は外食をさせ、風呂は銭湯に送り…とスタッフで手分けして選手を連れて行きました。「疲れていても選手の前では愚痴らないこと。愚痴を聞かせることで選手の士気が下がってはいけません。我々はつらくても歯を食いしばって笑顔で選手のために頑張ろう。」スタッフ間ではこう話しました。もちろん外食では選手のコンディションに問題が生じます。肉ばかり食べてしまうからです。野菜を食べないと明らかにパフォーマンスが落ちます。朝食で油っぽい物ばかり食べていてもダメです。コロッケよりは牛丼。サラダを必ず食べさせて…など、少しだけお母さん方の苦労を味わったときでもありました。

3月に入り、1日は長沼スポーツセンターで2年南空知選抜と練習試合を行いました。東日本選抜大会のDVDを観た秀島先生が会場に駆けつけ、マッチアップゾーンとプレスの修正点をアドバイスしてくれました。また、恵庭恵明中の吉本先生も会場に姿を見せ、選手の成長ぶりを見届けてくれました。翌日2日は北陽中にて札幌選抜1・2年と練習試合。前日の確認事項を活かして多くの成果を得ました。

3月2週目は思い切って再び休みを取りました。卒業シーズンのこの頃に1度チームに戻し、休養を与えたかったからです。この時期にそれほどインフルエンザが流行しなかったのは幸いです。選手はいよいよ迎える本戦に向けて身も心もリフレッシュすることができたと思われます。しかし、全く道選のことを忘れてしまうのではなく、多少は気持ちを向けてもらいたかったので1人1人に葉書で檄文も送りました。

3月3週目は旭川への遠征。初日は旭川工業との練習試合。粘り強いディナイ・ディフ

ェンスに戸惑いましたが、これも乗り越えるべき課題として見つけることができ、大きな収穫だったと言えます。翌日は旭川西高校との練習試合。ゾーンディフェンスをやりこめられるパターンをいくつか見せられ、本戦に向けての課題を絞ることができました。さらに、札幌へ帰るまでのバスに乗り込む待ち時間に日下部先生に講演をして頂き、いかにして勝利を獲得するか、考えることができた一日でもありました。「レイアップシュート」「パワープレイ」「オフェンスリバウンド」。勝つために必要な三要素として確認しました。さらにチームに勢いをもたらす三要素として「声」「ハンズアップ」「ダッシュ」の重要性を知り、苦しいときこそ自分のためではなく人のために戦うスピリットを強烈に意識することができました。本戦での戦いを振り返ってみると、選手はこれらをしっかりと頭に叩き込んでいたと言えます。

そして、3月第4週。厚別北中にて今までの総括と言って良い練習を行い、翌日は石狩選抜2年との実戦。ほぼ完勝とも言える内容で十分な調整を果たし、本戦へ意気揚々と向かうことができました。

多くの高校、選抜チームの関係者の方々に感謝致します。ありがとうございました。

4. 本戦で

東京に着いた初日の練習は空回り。元気は良いのだが、練習中に足を軽くひねったり、具合が悪くなる者が数名…。自分のチームであればカミナリの1つでも落とすかもしれませんが、選抜チームなのでグッと我慢し、「明日になれば多少痛くても泣き言など言わず頑張るだろう。」と自分に言い聞かせました。

大会1日目の試合会場は川崎市。宿舎の新宿から公共交通機関を乗り継いで行くことに。東京の朝のあり得ないラッシュの洗礼を浴びる中でも、相変わらずにぎやかな北海道選抜男子チーム。ちょっといかつい一般客の方に「うるせえぞ！クソガキ！」とすごまれて少し大人しくなりました。

予選リーグの初戦は滋賀。強豪のようにあまり思われぬ県ですが、かつては全中やインターハイでの優勝校を輩出したこともあります。さらに言うに「未知の強豪」が突如として現れるのがオールスターの特徴。思いもかけないチームが強いときも多々あります。案の上、信楽中の4名が中心となって粘り強くディレイド・オフェンスを行われ、24秒ギリギリに放たれるシュートを次々と決められ、大苦戦となりました。こちらのシュートは思うように決まらず、エースセンターの鷲見くんが途中で負傷退場。大ピンチとなりましたが、代わりに出た三柳くんが確実にその穴を埋め、相手センターがファウルトラブルに陥ったところをパワープレイで着実に加点。勝利を導きました。いつになく硬さが見られた試合で、思うようにシュートも決まらず、こういう試合こそ落としてしまう可能性があっただけにまずは勝利を手中にしてホッと一安心でした。

予選リーグ第2戦は地元の神奈川。全中と違い、ジュニアオールスターは予選リーグ1位しか翌日にコマを進めることができません。ここは何としても勝ちたいところでしたが、それは神奈川も同様。会場は完全アウェイの雰囲気です試合は展開しました。神奈川にいる友人の伝手などもたどってかなりスカウティングはしていましたが、予想以上に能力の高い神奈川チームのプレイに部分的にはタジタジになってしまうシーンも。その都度、盛り上がる会場の雰囲気に負けないようにと、普段は滅多にベンチで立たない私が大声を張り上げ、派手にガッツポーズをして選手を鼓舞しました。試合は最後の最後までつれましたが、審判の判定のクセをつかみ、終盤に攻撃が雑になった神奈川の際に乗じて連続ポイント。何とか勝利を収めて東京までの帰路につくことになりました。

大会2日目、決勝トーナメント1回戦の相手は鳥取。今をときめくNBAジュニアの選手が2名おり、選手交代をほとんどせずたった5名で最後まで戦い抜くチームでした。第1ピリオドこそ競りましたが、第2ピリオドからは相手の得点源であるNBAジュニアの選手のクセを見抜いて完全にアジャスト。一気に北海道ペースに持ち込みました。七飯中の成田駿くんが相手の後方からオフェンスリバウンドを掠め取ってタップシュートに行くというスーパープレイも決まり、快勝して2回戦へと進むことができました。

2回戦(準々決勝)の相手である大分は、埼玉との激戦を制して勝ち上がってきたチーム。

オールラウンドプレイヤーの4番の個人技に加えて、その勢い・粘りは要注意と思われましました。しかし、そんな不安もあつという間に消え去りました。立ち上がりからシュートが良く決まり、終始北海道ペースで試合を支配し、完勝と言っても良い形で勝利を収め、大会最終日へと進むことに。東京体育館に来てからの彼らは予選リーグの時とは別人のようで、大舞台でも全く硬くならず伸び伸びと自分達の力を発揮しており、正に千両役者、今風に言えばエンターティナーでした。キーワードになったのは「試合を楽しもう！」という一言でした。「勝とう！勝ちたい！」と思えば思うほど硬くなってしまいがちです。「自分達のプレイをやって負けるなら仕方ない。でも、自分達のプレイが本当にできれば負けることはないよ。だから、とにかく自分のできることをしっかりやって試合を楽しみなさい。失敗しても責任は先生が取るから！」試合前に選手にはそう話し、試合中は緊迫した状況になればなるほど「楽しめ！楽しめ！」とベンチから言いました。

また、私自身勉強になったのは選手に次のように話したことです。

「大きな会場に来て集中力が保てないときは一点を見つめろ。テニス選手や野球選手がボールを見つめるのと同じように、何か一点を見つめるんだ。その時に自分のへその下あたりにある丹田というツボに意識を集める。それが集中力を高める方法だ。逆に入れ込みすぎて周りが見えなくなってしまうときは天井を見ろ。広いだろ。こんなに広い会場で行っているんだ。いつかそのうちシュートも決まるさ、そう思いなさい。」

これは私自身の経験から来るものでもあり、またバスケット以外の本から学んだことでもあります。もし、バスケットにしか興味を持たず、バスケットばかりやっていたらこの言葉は言えなかったと思います。そう言う意味においても日頃からバスケット以外のことにも興味を持ち、勉強していくことが大切であるということを感じました。

大会最終日、準決勝の相手は東京B。京北中のスーパースター・田渡くんを始めとする超エリート軍団でした。試合前に鷺見くんの念入りなテーピングを終えてからサブアリーナへ入ると、アップ会場にいる北海道チームにいつもの「らしさ」がありません。表情も硬く、声もあまり出ていない。一方の東京Bはなぜか倍近い人数がアップ場におり、シューティングのリバウンドも手伝うほど(今思えば東京Aの子達だったのかもかもしれません)。明るい北海道の子供達がいつものように「ファイヤー！」と声を出すと、(そんなつもりはないのかもしれませんが)それをあざ笑うかのように「ファイヤ〜(笑)」と言り返され、その度にピリピリする…といった悪循環でした。

このままではいかん！と思い、ハーフタイムのアップを前に次のように話しました。

「東京Bがお前らのアップの声を真似したり、ちょっとバカにするような仕草をするのは、それだけお前らのことを意識しているということ。そんな挑発に乗って自分のペースを崩してはいけないし、交わすぐらいの気持ちを持ちなさい。また、華やかな東京に対し、地味でもひたむきに一生懸命バスケットをすれば必ず応援してくれる人はいる。能代工業がそうだろう。だから、自分達のやるべきことをやるだけだ。最後に言うけれど、俺は前回のオールスターで東京Aに勝っているし、長野カップで厚北は京北中に勝ったこともある。東京には負けたことないから心配するな！」

最後は一応事実ですがハッキリと言ってもいいような言葉で締めくくって選手をコートに出しました。その後、選手は本来の自分達のペースを取り戻し、ほどよい緊張感の中、天王山の準決勝の試合開始を迎えました。

スーパースター・田渡くんはやはりスゴイ選手です。油断したら3ポイントラインの2mぐらい後ろからでも平気で決められる力があり、ドライブの速さも天下一品でした。これに対し、北海道チームは総合力で勝負。全員出場であらゆる局面を乗り切りました。私が特に印象に残っているのは第2ピリオドの残り8秒、東京Bボールで相手がタイムアウトを取った場面です。ここで私は満を持して南町中の高田征希くんを出しました。北海道選抜チームが今大会で唯一2-2-1ゾーンプレスからマッチアップゾーンのディフェンスシステムを止め、ボックスワンに切り替えたときです。田渡くんに対し、運動能力の高い高田くんがフェイスガードでつき、残り8秒からのオフENSEをしっかりと抑えました。まかり間違っても3ポイントでも決められれば同点の場面でしたから、この攻防は重要なポイントでした。

前半の大ピンチを抑え、後半はやや北海道ペースで試合が進みました。しかし、東京Bが1-2-2ゾーンプレスに変えて当たりを強めてきてからは一進一退の攻防。苦しい時間帯もありましたが、北海道が誇る志水・小町のガード陣が持ちこたえました。残り16秒マイボールでタイムアウト。得点差は5点ありましたが、まだまだ油断はできない状況です。スローインからのインバウンズを作戰盤で確認。この時、恥ずかしながら作戰盤のコマを動かす手が震え、自分の修行の足りなさを知った次第です。それでも選手は確実にスローインからのインバウンズを行い、ファウルゲームで得たフリースローを志水くんが確実に決めて激戦に勝利しました。

勝負事においては「勝っても喜びを爆発させてはいけない。次の試合のエネルギーがなくなってしまう可能性があるから。」とよく言います。私もそう思います。しかし、今年の北海道選抜チームには底知れないパワーを感じました。駒大苫小牧高校が甲子園で見せた勇姿そのもののように勝つごとに強くなっていくかのような勢いを感じましたので、日頃は「こんなところでガッツポーズなどするな！」という私も選手共々雄叫びを上げて一戦一戦を戦い抜きました。

そして、いよいよ決勝戦。夢にまで見た東京体育館のメインコートでの試合です。場内アナウンスは北海道から。ちょっと緊張した面持ちの選手に先駆けて、私が少しパフォーマンス。ムードメーカーの小沢くんがさらに盛り上げていよいよ雰囲気は最高潮に。対戦相手が千葉だったことが、そんな中でも少し冷静になれる要因になったかもしれません。なぜなら、北海道カップに出場した習志野第五の選手が4名選出されているチームだったからです。一度の対戦だけで手の内がわかるほど単純なものではありませんが、全く知らない相手より良いのは言うまでもありません。また、この時キャプテンの志水くんが試合前の円陣で言った言葉が私の耳に今でも残っています。

「このメンバーで試合できるのもいよいよ最後。最後なら勝って終わって最高の思い出にしよう。」

試合は鷺見くんの強烈なブロックショットから口火を切り、黒坂くんのジャンプシュートで北海道が先制。その後も小町くんのミドルシュート、小沢くんの3ポイント、成田くんのペリメーターからのジャンプシュートで次々と加点。メンバーが疲れても大柳くんの速攻、伊藤くんの安定したゲームメイク、高田くんのスティールでゲームを終始北海道ペースに。後半に入ると、いよいよ志水くんがエンジン全開。連続ポイントでチームにさらに勢いをつけ、第3ピリオド終了間際には津別中・村田陵輔くんが速攻からのジャンプシュートを決めて千葉ベンチに「これまでか…。」とため息をもらさせました。

勝負の第4ピリオドは千葉がファウル覚悟の激しいディフェンスで追い上げを見せてきました。しかし、そこで決してあわてずにファウルゲームで得たフリースローを三柳くん、鷺見くん、そして1年生ながらいい所で再三渋い働きを見せた帯広第四中・鈴木光穂くんが冷静に決めて勝利を揺るがないものにしました。最後の最後で千葉のエース・小松くんが超ロング3ポイントを決められましたが、決められると同時にタイムアップ。歓喜の時を迎えることができました。

5. 最後に

振り返ると言うよりは非常にとりとめもなく文章を綴りました。申し訳ありません。でも、これが今回の優勝までの道程です。多少偶然めいたところも多々ありますが、今回の経験を整理し、日本一への道を一本でも多く見つけ、偶然ではなく意図的に日本一のチームを北海道で作っていくことができれば…と思います。

なお、日本一という栄冠を勝ち取ることができたのは関係者の方々を始め、選手・そして保護者の方々の絶大なる努力とご協力、そしてご支援があったからに違いありません。ありがとうございました。

また、スタッフとして共に奔走し、ヘッドコーチのわがままに最後まで付き合ってくれた鈴谷先生・山田先生・竹治先生には頭が上がりません。ありがとうございました。

大会前に惜しげもなく自らの考えるマッチアップゾーンを披露し、指導に尽力してくれた秀島先生。オールスター期間中には北海道選抜と行動を共にし、時にはトレーナーとし

て、時にはアナリストとして冷静なコメントを我々に送ってくれた吉本先生。感謝致します。ありがとうございました。

優勝の報を聞き、千歳空港までご多忙な中わざわざ迎えに来て頂き、即日のうちに祝宴を催して頂いた幸丸会長を始めとするジュニア連盟の方々にも感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

2008ジュニアオールスター北海道チームはこれで解散しますが、多くの財産を残すことができました。これを活かし、選手がより一層努力し、素晴らしい人間に育ってくれることを数ヶ月間の間ではありましたが指導した者として心から期待しています。

次年度はいよいよ三連覇への挑戦です。連覇を達成しているのは北海道と福岡だけ。三連覇を達成しているチームは未だにありません。この偉業に次年度は挑戦することになるわけですが、「強い北海道」を日本に知らしめるべく、ジュニアに所属する指導者が一丸となって切磋琢磨していけたらと思います。私自身も今回の貴重な経験を活かし、かつそれを皆さんに還元すべくこれからも精進していきたいと考えます。

最後になりますが、言葉では語り尽くせない気持ちを含めて皆様にお礼申し上げます。本当にありがとうございました。

HBA（北海道バスケットボール協会）指導者育成専門委員会